



## カポックに学ぶ

校長 緒方 健二

校庭の梅の木に、小さな芽が膨らみ始めました。本日、2月3日は立春です。寒い日が続いてはいますが、着々と春の準備が進んでいます。

昨夏、100円ショップで観葉植物の「カポック」を購入しました。私は、育てた経験も知識もありません。とりあえず、インターネットで調べながら、鉢植えの交換をしたり、肥料をあげたり、水やりをしたりとお世話を始めました。風通しが良いところを好むというので外に出したり、直射日光は避けるようにとあったので、カーテン越しに陽が当たるようにしたりと、いろいろと手をかけていましたが、成長はおろか、変化のない毎日が続きました。寒くなり始めたころ、様子を見ながら、水やりの回数を減らし、霧吹きで水をあげる毎日が続いていると新芽が見られるようになりました。そんな中、年末年始を迎えました。自宅に持ち帰ろうかとも考えましたが、思い切って置きっぱなしにすることにしました。年末には、水をたっぷりあげ、いつもの日光の当たる場所に置きましたが、休み中はとても心配でした。年明けに学校に来た時に、ドキドキしながら校長室に入ると、若々しい新しい葉っぱを広げて、待っていてくれました。カポックはしっかりと根を張り、成長する準備をしていたんだと、うれしくなり、思わず拍手をしてしまいました。

アメリカ先住民の言い伝えに

「子育て4訓」というものがあります。

乳児はしっかり肌を離すな  
 幼児は肌を離せ、手を離すな  
 少年は手を離せ、目を離すな  
 青年は目を離せ、心を離すな

元気に育つ  
カポック

子どもの発達段階に合わせて、親と子どもの距離を少しずつ離していく、親子のスタンスの在り方についての教訓です。年末年始で大きく成長した「カポック」の姿を見て、改めて、「子育て4訓」の教えを実感しました。

小学生という発達段階は、子どもが活動範囲をひろげ、社会性が育つ時期です。子どもが、自分の意志で思う存分活動できるように、大人が手を離してあげることが大切です。ただし、高学年であっても、まだまだ子どもです。心配なこと、危険なことがありますので、手を離しても、絶対に目を離してはいけません。そして、助けが必要な時には、手を差し伸べて、子どもが挑戦できるように支援をしたり、見守ってあげたりすることが、我々大人の役割です。手を離す距離感は、発達段階によって変わってきますし、子どもの状況によっても変わってきます。いつでも手を差し伸べることができるように心構えをしておきたいものですね。